

水上勉全集

6

水上勉全集 第六卷

昭和五十一年十月二十日初版
昭和五十五年七月十日再版

著 者 水 上 勉

発行者 高 梨 茂

印刷者 青 木 勇

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ八ノ七

電話(五六二)五九二一

振替東京二二三四

検印廃止

©一九七六

目次

飢餓海峡

あとがき

飢
餓
海
峽

序章 遭 難

一

海峡は荒れていた。

いつもなら、南に津軽の遠い山波がかすんで見え、汐首しおくびの岬みさきのはなから沖にかけて、いか釣舟の姿が、点々と炭切れでもうかべたようにみえるはずなのだが、今朝は一艘そうの舟も出ていなかった。

沖は空のいろと一しよおづみに風一色にぬりつぶされていた。墨をとかしたような黒い雲の出ている部分もあり、視界は正午近くになると、荒れる波と低くたれこめた雲に閉ざされた。

岸壁へうち寄せる波は高かった。港湾さんぽう棧橋せきしから、コンクリートの岸へ、轟音ごうおんをたてて猛りくるとたように襲いかかる。灰いろの波しぶきと、風の中に、大粒の雨がまじっていた。

倉庫やクレーンの静止した港湾は横なぐりにふきつける豪雨にぬれ、山の中腹に向って、段状にひろがっている町の屋根屋根はトタンや看板が激しい音をたてた。昭和二十二年九月二十日、函館港は、台風直前の風浪の中にあった。

午前十一時に、能登半島を通過した十号台風は進路をやや東北にとり、関東北部から三陸沖にぬけるといふのがこの日の気象台の予測だった。しかし、正午近くになると、札幌気象台と函館海洋気象台は、次のような警告を発している。

——昼すぎから、風は強くなり、陸上では最大風速二十メートルないし二十五メートル。海上では二十五メートルないし三十メートルに達する強風になる。海洋全域にわたって出漁船は注意されたし。この風は明朝早くに弱くなり、東から北に向きをかえ、海上へぬける公算が大きい。降水量は三十ミリから五十ミリと予想される——

午後三時に港を出るはずの青函連絡船層雲丸は、大きな波をかぶって棒を倒したようにみえる。棧橋に巨大な船腹をつけて待機していた。時間どおりに出航するかどうかにについて考慮がなされた模様であった。しかし、船は定刻より約五分おくれて出航合図のドラを鳴らした。にぶい短い警笛は、低い雲と波浪の荒れる沖へ物悲しいひびきをこめて吸われた。ちょっと見たところ悠長な船出に思われた。三十分後に、おそるべき大惨事が起きようなどと誰も考えなかったのである。層雲丸は船長戸丸市之助以下乗組員を含めて八百五十四名の乗船者があった。船は棧橋から離れて、巴型ともがたになった半島の突端から、港湾を出、平常航路の針路をとって沖に向った。だが、その直後に強い風をうけて大きくゆれたのだ。

普通、津軽海峡では、冬季には風速二十メートルから二十五メートルぐらいの風は珍しくなかった。船長はこれぐらいの風なら、危険なことはないと見くびったのである。空模様や、沖の荒れ具合をみて相当な嵐がくると予想はできても、気象台のいうことなど、往々にして的はずれ

ている。こんなことで、連絡船の欠航をみたことは稀でもあった。また、波のあらい棧橋に船を碇泊させておくと、岸壁に船体がすれて損壊することも考えられた。沖出しの必要がみとめられたのである。層雲丸は船長の命によって、通例の港湾待避を無視して沖へ出ていった。

その直後、風速は極度につよくなった。気象台の発表した三十メートルからはるかに上廻って四十メートルとなり、さらに十数分後には五十メートルの突風が襲った。船は大きくかたむき、この分では航行不能が予想された。いったん、沖へ出ようとしたものの、船長は俄に出航中止を指令した。そうして、そのまま港湾待避に移ろうと、船首をわずかに向きかえようとした瞬間、船尾から大浪がおいかぶさった。一瞬にして危機が訪れた。全乗客に救命具の用意が指令され、SOSが打たれたのは午後三時三十分のことである。

函館海上保安部は巡視船「おくしり」「とかち」「きたみ」など三艘を派遣して救助にあたらせしたが、いかんせん、三千トンの巨体をもつ層雲丸が大きくゆれている海上は波が荒く、近づけたものではなかった。風雨は巡視船の歯ざしりをあざわらうかのように一層激しくつづけた。黒い船体の上に、二階建の白壁の窓を美しくならべて浮いていた層雲丸は、あつというまに横倒しになった。波のあいだに没入したのはSOSを発して数分もかかっていない。

荒れくるう鼠いろの海へ、くじらの背中のようにひっくりかえった船腹がひとしきり見えていたが、一瞬、天をつんざくような悲鳴と叫声が起ったかと思うと、おそいかった波浪に乗船客は黒蟻のように呑みこまれた。

瞬時にして起きた阿鼻叫喚の有様を、陸上から目撃した者は誰もいない。

沈没は海難史上空前の大惨事といわれ、台風は五時間のちに函館上空を去った。嘘うそのような静かな夜をむかえていたが、悪夢の一夜があげそめるころ、港の栈橋から、波のうねりだけがのこっている海上をみると、目と鼻の先に層雲丸は横倒しになって浮いていた。救助作業に出た巡視船が、いまだに打ちよせる波にさいなまれながら、はかどらない救助に手をこまねいている姿があった。

函館から、北西にのびる港づたいの磯浜には、木の葉のようにいくつもの死体がうちあげられていた。

死者は四百十八名、行方不明百十二名、生存者は三百二十四名と新聞は報じている。大事故の原因は船尾から大浪が浸入したこと、貨車甲板、機関室開口部、その他の開口部に次々と浸水がはじまり、最初に発電機が使用不能となった。そのため船内が全部消灯、通信不能に陥った。泳ぎついた生存者の証言から推察すると、使用中の機関は全部浸水をうけて不能に陥っており、とりわけ、貨車取締具の切断によって、車輛しやりやうの転覆が重心を変え、一挙に船体の横倒しをすすめたものと判った。

二十一日の函館市は、遭難者の收容と遭家族の到着とで、ごったがえした。わけても七重浜ななえはま、久根別くねべつ、上磯かみいその海岸の悲惨は眼をおおうものがあつた。死体にとりすがって泣く家族の声や、傷だらけで虫の息となった漂着者が、救命ゴムボートや船具の端につかまって血の叫びをあげてい

る。

市内のホテルや棧橋駅の構内待合室は、怪我人と死体の收容置場に早変わりした。安否を気づかって、到着する家族たちは、港にちかい宿という宿にあふれた。

この二十一日の正午ごろであった。混乱の函館市から、約十五キロほど離れた矢不來という海辺の村から、遠く茂別の山へ入り込む国道を、東に向って歩いてくる三人の若者があった。

男たちはいずれも復員服を着ていた。三人とも、同じような雑囊を下げており、編上靴も、陸軍の払下げであることが一目瞭然だったし、持ちものといつては袋一つしかない手ぶらの姿まで三人は一しよだった。

中の一人は岩乗な軀をしていた。六尺ちかい長身だった。顔は陽に焼けて、赤銅いろだったし、顎が人一倍張り張っていた。耳の下から頬にかけて濃い無精髭が生えている。怒り肩の角張った男である。みたところ、最近まで外地にいたか、あるいは、内地の軍隊から復員して間のないような三人づれであった。大男のわきを歩いている二人は、一方は背がひくくやせていたが、もう一人は中肉中背だった。大男がかなり恰幅がいいので、両わきにいる二人は貧弱にみえたのは無理もない。心なし、ほかの二人は青白い顔をしていて、うつむきながら歩いてくる。

矢不來の浜に出るまでの道は国道だった。かなり広かった。道の両側は畑になっていて、市ノ渡という村を出て、一時間もすると、木古内に至る鉄道線路につき当った。三人は線路ぞいに函館の方角に向って黙々と歩いた。

台風の去った野面は澄んでいた。三人の男たちの歩いてきた背後には、遠くに桂岳の峰がくっ

きりうかんでいたし、左側には茂別の山々が灰いろにうかんでいた。

矢不來の村へ入った三人は、村口の「きぬた」という看板のかかったとうもろこしを売る店の前へくると立止った。互いに顔を見合せ、この店の埃だらけのガラス戸をあけて入った。午後一時ごろのことである。

きぬたの主人平島兼吉は、三人の男たちが汗びっしょりで埃だらけの顔をしているのに眼を瞠（みは）った。三人ともだままタタキの木椅子に腰を下ろした。平島兼吉は、街道筋の店でもあるから、顔見知りでない客には馴れている。彼は、男たちの注文をきくために、会釈（えいせき）をして立っていたが、タタキの隅の方で、何かぼそぼそとはなし合っていた三人は、とうもろこし二本ずつを注文した。腹がへっているらしく三人とも不機嫌（ふきげん）そうな顔であまり喋（しゃべ）らなかった。

店の前に立って、日除（ひよろ）のテントを下ろしていた平島の妻の定子が、横眼で三人をみた。と、やせた男が、心なし顔を伏せた。兼吉はこの三人の男が、市ノ渡村の方から歩いてきたことを勘で知った。彼は三人に向ってこんなことをいった。

「ひどいこってさア。沈没した船にまだ何百人という仏さんがつまってるって……巡視船がね、朝から近くへ寄ろうとしても、手エがつかんというります。大勢の人が死んでのう、あんた、函館はごったがえしておりますよ」

三人の眼が、頭のはげあがった平島兼吉の顔に一せいに集り、ギョロリと光った。この若者たちは層雲丸の沈没は知らなかったらしい。新聞もよまずに歩いてきたことがそれで知れる。平島兼吉は、勢いづいて昨日の事故についてくわしく話した。

「あんたたちは暢氣のんきな人たちだ、ご存じなかったんですかい」

そういつて平島が笑うと、やせた蒼あおい顔をした小男が、

「死体はまだ浮いとるンですか」

ときいた。

「はいな。船にはあんた、八百人の船客が乗ってましたものな。三百人くらいしか泳ぎついた人はおりませんからの。みんなあととは仏さんになんなさった」

顎の張った男が眼を大きくひらいた。嚙かみついていたとうもろこしを皿の上にゆっくり置いて、

「連絡船かね」

「そうだと、協民党の代議士が二人乗っていなさったし、札幌のよオ、市役所のえらい人も四人乗っていなさったそうだが、みんな死んじまったらしい」

三人はまだ顔を見合せている。沈没事故について異常な関心をもったことは眼の色に出ている。しかし、三人には急ぎの用事があるらしく、

「おっさん、なんぼや」

ひょろりとした小男が値段をきいて立ちあがると、つづいてあとの二人も立ち上がった。平島兼吉は、三人がポケットから裸の金をかぞえて六円ずつ出してくれるのを、合計で十八円受けとっている。三人は、店を出ると、陽ざしのはげしい矢不來の村の家のかげにかくれた。

函館警察署に置かれた対策本部は、遭難者の收容と、死体を引取人に手渡すことであけられていた。沈没船を棧橋にひきよせて、中からさらに死体をひきあげたときは、市内の仮收容所では狭くなり、七重浜に特別の死体收容所が設置されるに至った。警察はいちいち死体と遭家族を面通しさせ、乗船名簿と照合して、てきぱきと処理していったが、市内新川町の合同慰霊堂では朝から焼香の煙がもうもうと立ちこめて空をこがしていた。

事故の処理は難儀をきわめたともいえる。高等海難審判庁は、函館海難審判所に命じて、厳重な調査をさせた。戸丸船長がとった処置について、重大な関心を示したのである。気象庁の予測に手落ちがなかったか。船長の処置は気象台通報と照らして適正といえるか。あの嵐の中の出航をめぐって論議がかわされたわけであるが、これらの法的な処理のほかに、警察本部でも、事件処理の総合会議がもたれている。九月二十二日のことである。この席上で、函館警察署捜査一課に席を置く弓坂吉太郎という四十八になる警部補が、次のような発言をしたことが注目をひいた。「報告によりますと、死者は五百三十二名ということになっておりまして、このうち七重浜二百八十二名、船内百五名、湾内百四十五名という区別になっておるのでありますが、乗船名簿と遭家族の面通しによって、だいたい死者数は全部引取られたわけですが、今日になっても、三名の引取人のない死体がのこっているのはちょっと不審なのです。このうち一人は名簿によって旭川市の岡島秀次さん^{ただいま}じゃないかと思われるふしもあり、只今照会中ですが……救助船員の中

で、乗客係を担当しておりました小松茂行さんの証言ですと、二十日の乗船者の総数は八百五十四名、この人数は小松さんが記載した乗船名簿と合致しますが、おかしいことに、乗船者数よりも死体の数が二体多いという数字が出て困っております。小松さんは、名簿以外の乗船客は船長の命令で厳密に取締ったというっておられますし……、この二死体はよけいだったことになります。密航者がいたか、それとも——この死体に引取人がない理由を考えねばなりません、私はちょっと変に思っています」

弓坂警部補の発言は、西陽のさしこむむし暑い警察の部屋を奇妙な気分におとし込んだ。なるほど不審なことといわねばならなかった。二つだけ死体が多かったのである。

四

弓坂のしゃくれ顎のひきしまった顔を睜めた係官たちは、互いに顔を見あわせて、口ぐちに何かいいあった。

へ妙なことをいいたしたものだ……」

警部補がもち前の詮索ぐせをまたこの席上でもち出したという驚きと、なかば苦笑をまじえた色が皆の顔に出ている。

「弓坂さん」

札幌警察から列席していた同年輩の警部補が、函館署長のわきから口をだした。

「死体がよけいにあったといわれると、何か妙ないい廻しにきこえますね、船客係にきくと、こ

れまでに、よく、出航まぎわに走りこんでくるかつぎやがいた。泣きつかれると名簿にも記載しないまま乗船させるってこともあったといっていましたし、その点、よくおしらべになったでしょうな」

「もちろん、そのことは調査済みであります」

と弓坂吉太郎は、あつくちびるを怒ったようにつき出していった。

「注意しなければならぬことは、引取人がいまだにこないということでありまして……国鉄当局は、昨日長崎総裁が当地へ見えまして、弔慰金の方はだいたい一人一万八千円見当の支給をみると内定しております。新聞にもこのことは発表されていきましたから、死体ひき取りは、つまり、お金目当てという大変ですが、遠方の人でも必ず問合せてくると思うのです。ところが三つの死体だけは誰も引取人はありません。乗船者は総員八百五十四名、このうち死者五百三十二名、名簿と照合のすまない遭難者はいまのところ旭川市の岡島秀次さん一人きりで、この人は二十七歳だそうで、鉱業関係の職員だということ……旭川から遺族がみえれば、確認は時間の問題だと思えます。しかし、旭川警察にもこの旨照会いたしましたがいまだにどういうわけか返答がありません。岡島さんの場合は、いづれ解決はつくと思うのですが、あとの二つの死体は処置に困るわけです。引取人のない死体は不思議です」

「たしかに、乗船名簿に脱落はないでしょうね」

「ございません。その証拠に、国鉄が乗船名簿によって、罹災者家族一切に連絡をいたしましたところ、すべて報告があり、遺族会でも、この点、死体と遺族との対面は三人だけをのこすだけ